



Title	[3]健康相談(III 自己評価)
Author(s)	
Citation	長崎大学保健管理センター概要 . vol.11, p.153-155; 2001
Issue Date	2001-03-02
URL	http://hdl.handle.net/10069/5331
Right	

This document is downloaded at: 2017-09-25T02:39:59Z

〔 3 〕 健康相談

〈現状の説明〉

日常の健康の悩みや問題がある学生・教職員に対して、保健管理センターでは無料で相談に応じている。長崎大学は3キャンパスに分かれているため、坂本地区・片淵地区にはそれぞれに分室を設けている。

相談日時は本部地区では月曜日～金曜日の8時30分～17時、坂本地区分室では月・金曜日の8時30分～12時、片淵地区分室では水曜日の8時30分～12時である。

相談スタッフとしては、本部地区では医師（内科・精神科）、看護職、カウンセラー等が対応している。また医学部・歯学部附属病院に派遣をお願いし、医師、歯科医師、栄養士の応援を得ている。坂本地区分室では医師（内科）、看護職が、また片淵地区分室では看護職が相談に応じている。

相談項目としては本部地区では一般内科相談はもちろん、専門スタッフによる相談として循環器、呼吸器、消化器、内分泌代謝等の相談、婦人科相談、歯科相談、精神衛生相談、栄養相談などを設けている。

次に健康相談の利用状況について経年的に見ると、その相談件数は増加傾向にある。相談数が圧倒的に多いのは内科相談で、年間2500件を越える。主な相談内容は風邪が圧倒的に多く相談の約4割を占める。風邪の相談件数は毎年増加傾向を示していたが、今年度はインフルエンザの大流行でさらに増加した。そのほかの内科相談の内容としては高脂血症、高血圧、脂肪肝等である。相談の結果、治療や検査が必要となった場合には、内服・外用等の救急薬、心・腹部の超音波装置、生化学自動分析装置、心電計等を備え無料で対応している。

精神衛生相談は平成8年までは相談実数、延数共にめざましい増加を示していた。近年は延件数は減少したものの、実数はやや増加傾向を示す。内容は神経症圏、気分障害の相談が半数以上を占める。また対人関係、性格・能力、進路の相談など該当疾患のない相談が今年度は昨年より2倍に達した。男性のみであった相談員を平成9年2月より女性のカウンセラーを起用し配置した。

婦人科相談は平成8年より相談を開始した。女子学生が性に対する認識を深めたり、気軽に相談できる場として好評を得ている。医師は医学部附属病院産婦人科より応援を得ている。相談件数は約80件で横ばいである。相談内容としては無月経、性感染症などである。

歯科相談も相談件数は約90件で大きな変化はない。相談内容は歯周疾患、顎関節症疑い、う蝕である。

このような健康相談の広報については、ホームページ、健康コンディショニング等の講義、新入生健康診断オリエンテーション、学園だより、学生案内、掲示などで行っている。

〈点検・評価〉

教職員の健康管理上、生活習慣病は重要な問題である。また青年期は発達段階から見ると健康障害の少ない年代であるが、近年大学生の年代で注目されている健康上の問題として高脂血症、脂肪肝、肥満、高血圧などの生活習慣病、若い女性に多い無月経や摂食障害、歯科においては歯

周疾患、顎関節症、う蝕、また神経症、対人関係、不登校などの問題が挙げられている。保健管理センターでは各年代に起こりやすいこれらの健康上の問題に対し、専門スタッフを配置し相談窓口を設け対応している。また健康相談の利用結果からは、それらの問題に対し利用がなされているのうかがえる。しかし検診で把握した結果等から見ると、実態はさらに多くの対象者が存在していて、相談に至っていない者も多いと思われる。

また健康相談の点検・評価を考える時、利用者側からみたサービスについての評価は大変重要である。しかしそれについては、これまで検討される事はなかった。これを機会に平成12年度には利用者側から見たサービスについての評価を行う予定である。

〈長所と問題点〉

保健管理センターの健康相談の長所としてあがるのはまず、様々な健康相談項目を設けている事や専門スタッフが充実している事である。スタッフについては保健管理センターのみでなく併設の医学部・歯学部附属病院の医師、歯科医師、栄養士の応援を得ている。また一般的な相談体制では相談を受けた後でそれぞれの専門に振り分け紹介されることが多いのに対し、保健管理センターでは初めから専門スタッフによる相談を受ける事が可能である。また精神衛生相談では、相談者と同性の相談員が望ましい場合もあり男女の相談員を配置している。また精神科医とカウンセラーの両側面から対応できる体制をとっている。

次に長崎大学の周辺は多くの医療機関に恵まれているものの有料では必要な相談、診療、検査を受けない者も多い。保健管理センターでは内服・外用等の救急薬、心・腹部の超音波装置、生化学自動分析装置、心電計等を備え、学生・教職員に対して無料で対応し、気軽に相談を受けやすくしている。

そのための問題点としては今後も無料で対応していくには、人件費や救急薬、試薬、機器の維持費など、増加していく経費に対し予算措置が必要となってくる。

次に問題点としては広報があげられる。学生・教職員の各年代に起こりやすい様々な健康上の問題に対し、それらの相談の利用がなされてはいるものの、実態はさらに多くの対象者がいるものと思われる。特に婦人科、精神衛生、歯科相談では何らかの広報が必要と思われる。また精神衛生は相談の性質上、相談体制を知っていても自分から訪れるという事がない場合もあり、学部との連携も重要になっている。

〈将来の改善・改革に向けた方策〉

今回健康相談の問題点としてあげられた広報について、改善に向けた方策を検討した。これまでホームページ、健康コンディショニング等の講義、新入生健康診断オリエンテーション、学園だより、学生案内、掲示などの案内についてはすでに実施してきた。これらの方策としては、一つには保健管理センターへの来所が増えるような試みが健康相談へとつなげる方法でもあると思われる。来所してもらう事は、健康相談について知ってもらうチャンスで、次のステップとして相談へとつなげる事が可能である。近年、全自動血圧計、身長・体重・体脂肪計等の設置やアルコールパッチテストの実施によりセンターへの学生の来所が急増した。この事は、従来の「保健

管理センターは病気の人が行く所」といった偏見を一掃した。興味ある健康機器を今後も設置していく事は、学生自身の健康管理や保健管理センターの理解につながり、そして気軽な相談へとつながっていく事と思われる。

しかし精神衛生についてはまだ一般的に理解されにくく、偏見が強い。知ってもらうことが即相談にはつながりにくい。そのため2つ目として相談の広報のみでなく精神衛生に対する啓蒙活動も重要である。精神・心理的な問題を抱えた学生を大学全体で支援していく事を目的に平成9年12月にメンタルヘルス懇談会が全学的な組織として発足した。保健管理センターが独自に企画していた講演会はその後平成10年からはメンタルヘルス懇談会と共催で実施している。啓蒙活動の効果は一朝一夕にはあがらないが、今後もこのような講演会等を継続して企画していく事で、精神衛生に対する理解が深まっていくと思われる。また精神衛生相談は保健管理センターだけでは解決できない問題も多く、学部との連携をはかるためにも、今後はその組織をさらに強化していく事が重要である。

また、これまで検討される事のなかった利用者側からみた健康相談について、平成12年度には2・3年生を対象としたアンケート調査を計画し、保健管理センター利用の有無、利用した結果、施設の場所、相談時間帯、相談項目、設備などについて調査し、評価・改善・改革の資料とした。